

書評 いかにしてフランス文学者は 文学の消滅に立ち向かうのか？

——水林章『公衆の誕生，文学の出現—ルソー的経験と現代』，
みすず書房，2003年4月を読む——

桑 瀬 章二郎

著者の水林章氏は誰もが認める現在の日本を代表する18世紀フランス文学研究者のひとりである。氏の関心の中心は18世紀という時代の文学史というよりもむしろ社会史や文化史にあるといえるが、分析の対象となるのは常に文学テキスト、とりわけルソーの著作である。氏の最初の著作である『幸福への意志』は、「文明化」の鍵概念をもとに、18世紀フランスの社会全体を読みなおそうとする壮大な意欲作であったが、広い領域を検討しながらも、著者の視線は決してルソーのテキストから離れることはなかった。副題が示すように、本書もまた極めて大きな主題—フランスにおける「公衆」概念の誕生過程—を扱いながら、その分析の軸となるのはやはり文学テキスト、とりわけルソーの自伝的著作、『告白』と『対話』である。精緻なテキスト分析から社会史的な概括へと向かい、長期的な文化史の見取り図を提示した後、極めて文学的なミクロ・レクチュールへと立ち戻る著者の試みは、氏自身の言葉を借りれば、「文学」と「歴史」のあいだに位置するものであると言える。緻密なテキスト批評と大胆な社会史的解釈とを見事に交錯させる著者の力量には感服せざるをえない。『公衆の誕生，文学の出現』は、近年日本語で著された18世紀フランス文学に関する最も重要な書物のひとつである。

この作品はしたがってルソーのテキストについて、あるいは18世紀の知的風景についてさまざまな考察を呼び起こさずにはおかないのだが、評者がここで論じたいのは、そうした純粹に学術的な問題ではない。私が問題にしたいのは、

この重要な作品の「読者」の問題である。もっとわかりやすくのべよう。評者には、日本でルソーを研究する者、18世紀の文学を研究する者が本書を読み終えたとき、次のような問いを発さざるをえないように思えるのである。啓蒙の時代のフランス文学、文化社会、そしてルソーについてのこの見事な書物は、いったい誰に向けて書かれているのだろうか？もう少し正確に言うべきだろうか。誰がこの本を読みうるのか？そう、ここで論じたいのは、18世紀研究者がいかにか日本語で、自分の専門について書き得るのかという問題である。

周知のとおり、現在の日本では多くのフランス文学者が失業している。多くの大学で文学部が消滅しつつあり、また文学部が存続しているところでも、文学者は「文化」の専門家、「表象」論の専門家、「国際」関係の専門家に転職を迫られている。あるいは自らの出自を隠蔽し、「思想」の専門家として第二の人生を歩み始める者もいる。文学者であり続ける幸運に恵まれた人々も、決して安定した立場にいるわけではない。学生はますます文学テキストから遠ざかり、文学はそれ自体として若者の知的好奇心を刺激するものではなくなっているからである。

これまでの日本においてフランス文学者は特権的立場に置かれていたといえる。大学制度のなかで英文学がどれほど優位な立場にあらうと、仏文学者は常に自らの研究に自負と自信を持ちえた。仏文学者にそうした象徴権力を与えていたのは、いうまでもなく小林秀雄以来の日本の批評の伝統であり、かつてならヴァレリー、アラン、サルトル、そして近いところではフーコー、ドゥルーズ、デリダに代表されるフランスの思想家たちの活躍であった。仏文学者は、彼ら世界的に影響力を持った思想家たちと課題を共有すること、あるいは共有していると夢想することができた。しかしながら、日本における文芸批評の衰退とともに、そしてフランス思想界の相対的な衰弱とともに、こうした仏文学の優位は揺るぎ始めた。いまや日本の知識人にとって、仏文学はヨーロッパ地域の一文学にすぎない。そして当然のごとく、仏文学を志す学生にとっても、仏文学はかつて持っていた特別な意味を失ってしまったのである。

仏文学研究の衰退によって、すでに以前から限られた読者しか持たなかった

18世紀文学についての研究書の読者はさらに減少している。そしてこうした状況は明らかに18世紀研究者の執筆スタイルにある変化をもたらすことになった。日本でごくわずかの読者しか想定できなくなった彼らの多くは、世界に散らばった、研究対象を同じくする専門家にむけて、フランス語であるいは英語で書き始めたのである。こうした戦略の転換は何も18世紀文学に限ったものではないのかもしれない。多かれ少なかれ同様の現象が、他の専門分野にも見出せる。しかし、18世紀研究者の執筆スタイルに起こった以上のような変化は相対的に大きなものであったといえる¹¹⁾。

日本のフランス研究者の中でおそらく最も美しいフランス語の書き手のひとりである水林氏は、言うまでもなくフランス語で世界の研究者に向かって書くこともできる人物である。実際に氏のこれまでの重要な論考のいくつかはフランスの雑誌に発表されてきた。そして今後、氏の活動は一層フランスを中心として展開されることになるであろう（もちろん私は一方的にそれが望ましいと主張するわけではない）。しかし、今のところ氏は日本語で、日本の読者に向けて書いている。それが、評者には極めて重要な選択であるようにみえるのである。文学にこだわりつつ、日本語で、18世紀というわが国では決して光のあたることの多くない領域について書きつづけること。もう存在しないかもしれないフランス18世紀研究を志す学生に向かって、あるいはあまりにも細分化が進んだが故に近隣の研究領域にごく限られた関心しか示さない「専門家」に向けて書くこと。言いかえれば、消滅したかもしれぬ「18世紀フランス研究」を再び構築するため、あるいは創造するために書くこと。水林氏の著作からは、日本語で書くことの困難がひしひしと感じられる。両手で数えられるほど数少ない読者に向かって書くことそれ自体がひとつの挑戦なのである。このような観点から少し本書を読んでみよう。

本書は三部からなるのであるが、その三部が見事に構成され、互いに関連しあい、18世紀の知的風景についてのひとつの明確な歴史的見取り図を提示している。

「公衆の誕生—「文芸の国家」から「公衆」へ」と題された第一部では、ルソ

ーが生きた18世紀後期における「公衆」概念の検討に入る前に、その「前史」、すなわち17世紀における「公衆」概念の変遷が検討される。ピエール・ベール、デカルトなどの著作にあらわれる「文芸の国家」概念を確認することから始めた著者は、モンテーニュのような作家の著作、辞書類における記述や、『ル・シッド』論争の際に用いられた用法などを検討していく。そしてこうした「前史」が、ルソーの同時代の作家にとっての「公衆」、特にヴォルテールとディドロが必要とし、創出しようとした公衆—啓蒙された議論する公衆—とどのように関係しているかが明らかにされていく。

「ある逃走の記録」と題された第二部では、第一部でその変貌過程が明らかにされた「公衆」の18世紀的形態—聖化されたヴォルテールの「公衆」—に疑問を投げかけた作家として、ルソーにおける「公衆」概念が検討される。そのために『告白』のいくつかのエピソードが丹念に検討される。例えば名高いカフェ「グラン・コマン」における朝食の場面が、偽りの言葉が無限に増殖する公共空間に対するルソーの批判として精密な読解の対象となり、さらにはフォンテンヌブローでの『村の占い師』上演に作曲家として立ち会ったルソーが感じた宮廷的世界に対する強烈な違和感が、社交的公共的世界との決別という観点から分析される。次に「文芸人」に敵対する作家ルソーという観点から、サロンの世界に対して表明される嫌悪や、ディドロとの確執といった主題が検討されていく。

第三部では、『対話』という作品が、「公衆」「世論」「言説」といった鍵概念をもとに、詳細に分析される。『告白』の最終部において語られる「朗読会」においてルソーが経験した「沈黙」—自己弁明を目的とする『告白』をサロンで朗読した作家は聴衆の重苦しい沈黙に出会う—を、ルソーが『対話』という作品においていかに乗り越えようとするか。このような観点から、『対話』を織り成す複雑な「言語」構造が分析される。公衆・国民がいかにテキストに刻印されているか、そして公論=社会的言説の運搬者がどのように表象され、作品内で、どのように乗り越えられているかが詳細に検討される。

このように、水林氏はフランスにおける「公衆」概念の歴史的変遷を辿り、

18世紀的な「公衆」概念を突き破ろうとした作家としてルソーを提示するのである。「啓蒙の時代をヴォルテールや百科全書派とともに生きながら、「公衆」の創出に向けて傾けられるほとばしり出る情熱と汲み尽くしえないエネルギーの奔流のただなかで、ただひとりジャン＝ジャック・ルソーだけは、啓蒙に内属する「文芸人—公衆」というリンクに対して一種の不協和音を奏でていたように思われるのである（8ページ）。」「前史」としての17世紀、「公衆—啓蒙」の時代としての18世紀、そして啓蒙の時代の「異邦人」ルソー。図式としてこれ以上明確なものはない。啓蒙の時代の作家についてよく知らない日本の読者でもすぐに理解できるような歴史的見取り図であるといえる。

しかし議論をここまで単純化することには大きな危険が伴うのではないだろうか。17世紀から18世紀までという広い時期を問題にしながら、紹介されるのは限られた作家のテキストだけであるし、複雑なルソーにおける公衆像も極度に単純化されていると言わざるをえない²⁾。またこの時代の「公共性」をめぐっては膨大な数の研究が書かれてきたが、そうした研究もほとんど紹介されない。主題に少しでも通じている者なら、著者による過度の図式化、単純化に当惑せざるをえないように思われる。それではどうしてこのような過度な単純化が行われなければならないのか？

この問いについて考えるうえで重要であると思われるのが、先に述べた読者の問題である。やはりフランスの読者と日本の読者との間には大きな距離が存在していると言わざるをえない。啓蒙の時代における公衆の問題は、フランスで激しく議論されてきた極めて重要な、したがって極めてよく知られたテーマであるにもかかわらず、日本ではあまり論じられることがなかった。言い換えれば、フランスでは論じ尽くされた感があるが、日本では十分に紹介されなかった主題なのである。したがって、日本の読者に向けて書くとすれば、単純化された図式、そして啓蒙的な概説が必要になる。水林氏はそうした役割をあえて引き受けようとするかに見える。

フランスで論じ尽くされた主題。それは水林氏が言及する先行研究をみればすぐにわかる。例えば、第一部で「前史」が検討される際、水林氏がほぼ完全

に依拠しているのがエレヌ・メルランの『17世紀における公衆と文学』である³⁾。フランスでは今やすっかり「売れっ子」批評家となった彼女が1994年に表したこの有名な書物の後で、誰が17世紀における公衆概念を再び検討しようと試みるであろうか？しかし、フランスにおいて不可能な「前史」の検討こそ、日本の読者にとっては不可欠なのである。水林氏はメルランが圧倒的な力量で分析してみせたさまざまなテクスト（論争文、パンフレット、辞書等）を再び引用し、丁寧に解説を加えていく。時にはメルランの分析の持つ微妙なニュアンスを消し去りながら。おわかりいただけるだろうか？日本における残り少ない「18世紀研究者」「ルソー研究者」は、水林氏の議論を必然的に物足りないと感じるのである。

第二部も第一部と同様、水林氏の主張の大部分は、フランスのいくつかの優れた先行研究によって支えられている。J・ファールブル、J・M・グールモ、B・メリ等の研究は⁴⁾、「ルソー研究」という小さな世界に関わるものであれば誰でも知っているような古典的なものばかりである。水林氏は自らの主題を扱ううえで避けて通ることができないこうした研究を丹念に紹介していきながら、啓蒙の時代の作家達とルソーの間に横たわる溝の深さを強調していく。考えてみれば、こうして明らかになるルソー像—グールモ風に言えば、体制の内部にとどまりながらその体制を批判する作家としてのルソー—は、日本においてはほとんど紹介されることがなかった。そして、ここでも第一部同様、「18世紀研究者」「ルソー研究者」は、水林氏の議論を必然的に物足りないと感じるであろう。例えば、ルソーの特異性を際立たせるためにディドロが対置されるのであるが、その「公衆」概念は18世紀の作家が抱く平均的な概念として紹介される。こうした単純化されたディドロ像は、いうまでもなく現在のフランスでは受け入れられないであろう⁵⁾。

しかし、こうした困難な執筆スタイルについては、改めて指摘する必要がないのかもしれない。なぜなら水林氏自身が本書で展開する議論が先行研究に多くを負っていることを認めているからである。かつて、鷲見洋一氏が「正直さ」⁶⁾と呼んだ、この無防備さは感嘆に値する。『対話』の分析がなされる第三

部では特にこうした依拠がはっきりと示される。第三部もこれまたルソー研究の領域では極めてよく知られた二つの研究—ミシェル・フーコーと、ジャン＝マリー・グールモの研究にほぼ完全に依拠しているのである⁷⁾。フーコーが立てた図式にそって、『告白』の朗読会から『対話』執筆までのルソーのテキストにおいて「公衆」がいかなる役割を果たしているかを明らかにした後、『対話』という作品に「公衆」がどのように刻印されているかを検討する。「公衆」の刻印という観点はいうまでもなく、『対話』についてこれまでに書かれた最も重要な研究のひとつであるグールモの論文によって提示されたものである⁸⁾。しかし、日本で書かれた研究で、このグールモの研究が紹介されることは、評者が知る限り一度もなかったし、こうした観点から『対話』が論じられることもなかった。ここでも水林氏は日本の読者とフランスの読者の距離に意識的であらねばならなかったのであろうか。

こうした日本の読者とフランスの読者との間に横たわる差異のほかに、水林氏の分析が陥っている過度の単純化を考えるうえで重要なもうひとつの要素がある。それはテキスト分析への水林氏の嗜好である。本論の初めに述べた水林氏の分析の二つのスタイル、つまりミクロ・レベルでのテキスト分析とマクロの歴史的概観のうち、水林氏の手腕が冴え渡るのは前者においてであるといえる。例えば、『告白』の中にあるカフェ「グラン・コマン」における朝食の場面で「公衆」がどのように描かれているかを詳細に論じる際、あるいは『対話』の「前掲書の後日談」にどのような「受け手 *destinataire*」像が現われているかを丹念に検討する際、水林氏は水を得た魚のように悠々と選ばれた短いテキストの中を泳ぎまわる。すでにメルランによって論じられたことのある17世紀の象徴的なテキストを再び取り上げる際、または様々な辞書類に現われた *public* の語を検討する際も同様で、水林氏は語彙の意味を手際よく、そして注意深く考察していく。こうした卓越したミクロ・レベルでの読みが繰り返し展開される一方で、そこから導き出される結論があまりにも単純なので、提示される歴史の枠組みの凡庸さが際立つことになるのである。17世紀について言えば、先に指摘したように水林氏が依拠するメルランは氏よりもはるかに慎重に議論

を進めていたし、「公衆」それ自体の概念はというと、どうやらそれはハーバーマスやハンナ・アーレント、ベネディクト・アンダーソンといった、さまざまな解釈を許容する、歴史的に見ればあまりにも粗雑な議論に単純に結び付けられてしまうようなのである。象徴的なのは、公共圏とフランス革命の関係という最も重要で微妙な問題に水林氏がまったく興味を示していない点である。それによってどれほど「図式」が複雑になったにせよ、やはり公共圏とフランス革命の関係については触れておくべきであったのではないだろうか⁹⁾。

したがって、本書は厳密な意味での「専門書」ではないのかもしれない。しかしまた単なる「啓蒙書」でもないことも明らかである。日本語で、日本の読者に向かって、つまり「18世紀研究」という領域をよく知らない読者に向かって書きながら、なおかつ「専門性」を持った主題について「新しいこと」を語る。あるいは、極めて大きな歴史的概観を示しつつ（それは「18世紀研究者」以外にとっては極めて有効な枠組みとなる）、具体的なテキストを巧みに読み解いてみせること。これこそが水林氏の目指すところであるように思われる。たしかに、浩瀚な処女作『幸福への意志』と比較すると、本書において専門性は薄れ、啓蒙的な性格があまりにもはっきりと前面に押し出されているような印象を受ける。満を持して刊行した処女作が、日本の数少ない18世紀研究者からも、それ以外の読者からも黙殺されたことが影響しているのかもしれない。そういう意味では、本書がどのような反響を引き起こすかが、今後の水林氏の仕事に大きな影響を及ぼすであろうことは明らかである。かつて鷲見氏は別の文脈で、水林氏の仕事は、日本の18世紀研究が抱えている問題を明るみに出す、と述べたが¹⁰⁾、本書をめぐる私が論じてきた観点からも同様のことが言えるのである。

註

- 1) あるいは、異なる観点から見れば、18世紀研究は比較的早い時期から外に向けて書かれていたとも言えなくもない。山本淳一氏は、ジャック・ブルースト『16—18世紀ヨーロッパ像』(岩波書店、1999年)の「訳者あとがき」で次のように書い

ている。「日本のフランス研究において、18世紀研究の部門はもっとも先進的な分野の一つであり、国際的な業績を発表している研究者の層も厚く、海外の学者との交流、度重なる国際研究集会の開催などきわめて活発な活動が行われている」(353ページ)。しかし、私にとってはやはり、山本氏が述べるような日本の18世紀研究の「国際化」は、日本における読者の消滅に起因しているように思われる。

- 2) ルソーにおける公衆像の複雑さを指摘する研究については、ほとんど言及が省略されている。代表的なものとして次の研究を挙げることができる。Collette Ganochaud, *L'opinion publique chez Jean-Jacques Rousseau*, Atelier National de Reproduction des Thèses, Université Lille III, 1980.
- 3) Hélène Merlin, *Public et littérature au XVIIe siècle*, Les Belles Lettres, 1994.
- 4) Jean Fabre, « Deux frères ennemis : Diderot et Jean-Jacques », in *Lumières et romantisme*, Klincksieck, 1980, Jean-Marie Goulemot, « Rousseau et les figures de l'intellectuel », in *Saggi e ricerche di letteratura francese*, vol. XXVIII, 1989, Benoît Mély, *Jean-Jacques Rousseau, un intellectuel en rupture*, Minerve, 1985.
- 5) 特に70年代以降のディドロの変貌の重要性を明らかにした研究として次の古典的研究がある。Jacques Proust, « Diderot et l'expérience russe : un exemple de pratique théorique au XVIIIe siècle », *Studies on Voltaire and the Eighteenth century*, n.155, 1976, Jean-Marie Goulemot, « Jeux de consciences, de texte, de philosophie : l'art de prendre des positions dans l'Essai sur les règnes de Claude et de Néron de Diderot », *Revue des sciences humaines*, 1981-2, Georges Benrekassa, « Scène politique, scène philosophique, scène privée : à propos de la Lettre apologétique de l'Abbé Raynal à Monsieur Grimm », in *Interpréter Diderot aujourd'hui*, Le Sycomore, 1984. また次の研究を参照のこと。Diderot. *Les dernières années*, Colloque du bicentenaire, Edimbourg University Press, 1985. それから、これも紙面の問題なのか、いくつかの重要な研究、例えばグールモの他の論文への言及が抜け落ちている。
- 6) 「これは書評ではない—水林章の二冊の書物をめぐって」, 『文学』, 1997年春号。
- 7) 「ルソーの『対話』への序文」, Jean-Marie Goulemot, « Stratégies et positions dans les Dialogues de Rousseau juge de Jean-Jacques », *Romanistische Zeitschrift für Literaturgeschichte*, 1979.
- 8) 同じ時期にジャン=クロード・ボネも『対話』に注目していたが、その研究も日本では紹介されることはなかった。
- 9) 啓蒙の時代の「公共的世界」とフランス革命との関係については名高いキース・ベーカーやモナ・オズーフの研究をはじめ、膨大な数の研究がある。ハーバーマスの『公共性の構造転換』がこの分野に与えた影響については、ギロム・がうま

く整理している。Jacques Guilhaumou, « Espace public et Révolution française — Autour d’Habermas », in *Raisons Pratiques*, 3, 1992, *Pouvoirs et légitimité*.

10) 前掲書。